

# 日本における無子志向の未婚男性に関する分析

## An Analysis of Childless Never-married Men in Japan

守泉 理恵 (国立社会保障・人口問題研究所)

MORIIZUMI Rie

(National Institute of Population and Social Security Research)

moriizumi-rie@ipss.go.jp

日本において、1970年代半ばから現在まで続く少子化は未婚化・晩婚化・晩産化といった「家族形成行動の先送り」が主因であるとされ、1960年代生まれ以降の世代でそうした行動変化が進行した。少子化を引き起こした1960～70年代前半生れの世代については、2000年代以降、順次再生産期間を終えたか、終えつつあり、その出生行動の全容が把握できるようになってきている。ここで明らかになってきた事実の1つは、生涯、子どもを持たない女性が増えていることであった。マックスプランク人口研究所とウィーン人口研究所が共同で運営している **Human Fertility Database**<sup>1</sup>によれば、1973年生れの日本の女性の無子割合は27.9%であり、これは国際的に見ても非常に高い水準である。それだけでなく、1900年生れ以降の日本の女性の無子割合の変遷から見ても、この値はかつてない高水準であるといえる<sup>2</sup>。

しかし、これまで日本の無子の状況について分析されてきたのは、データの制約からおもに女性についてである。婚姻と出産が密接に関連している日本では、未婚者のほとんどは無子であるが、女性以上に未婚者が多い男性では、無子割合も女性より高い可能性がある。人口動態統計で正確な出生のデータが毎年蓄積され、集計されている女性に比べ、男性の子ども数や出生率などは、現在、公的統計においてまったく把握されていない。男性の無子については、学術的な標本調査のデータから分析せざるを得ないが、そうした分析に適切なデータも少ない。

そこで、本研究では、男性の無子に関する研究の第一歩として、国立社会保障・人口問題研究所が実施している「出生動向基本調査」の独身者調査データを用い、男性の無子志向の動向や、無子志向の男性に特徴がみられるかどうかについて分析を行った。出生動向基本調査では、第10回(1992年)、第13回(2005年)、第14回(2010年)、第15回(2015年)において独身者にも調査時点までに持った子ども数をたずねており、無子の男性を特定することができる。これらの調査回の個票データを用いて、男性の希望子ども数の推移や、「意図した無子」の男性と「意図せざる無子」の男性の構成割合の推移などを観察し、未婚・無子志向男性に特徴がみられるか分析を行う。

---

<sup>1</sup> <https://www.humanfertility.org>

<sup>2</sup> 守泉理恵 (2019) 「日本における無子に関する研究」『人口問題研究』75 : 1, pp.26-54.